

---

死とその後にくるもの

ディスクワールド・シリーズ 掌編

テリー・プラチエット 著

Copyright © Terry Pratchett 2002

---

死神がその哲学者に会ったとき、哲学者は、どことなく興奮した様子で云った。「この瞬間には、わかるかね、ワシは死者でありながら、死んではないのだ。」

死神はため息をもらした。やれやれ、連中の一人か、死神は思った。また量子の話にいきつくのだろう。死神は哲学者たちを相手にするのにうんざりしていた。連中はいつもごまかして切りぬけようとする。

「いいかね」哲学者はいった。死神は、じっとしたまま、哲学者の寿命の砂が砂時計の中を流れ落ちるのを見つめていた。「すべてのものは小さな粒子でできておる。その粒子は同時にあちこちの場所に存在できるという奇妙な性質を持っておる。小さい粒子から作られた物は、じゃが、一度に一つのところにとどまろうとするし、量子論によれば、そいつは正しいとはいえぬ。つづけていいかね？」

**かまわぬ。が、無期限にとはいかぬ。**死神は云った。**すべての物事には終わりがある。**死神は落ちつづける砂から視線をそらさなかった。

「うむ。まあ、宇宙が数限りなく存在することに我々が合意するならば、その問題も解決じゃ！無限の数の宇宙が存在するならば、そのうちの何千もの宇宙に、このベッドも存在していることになる。すべてが同時にだ！」

**それは移動するのかね？**

「なんじゃと？」

死神はベッドに向かってうなずいた。**そのベッドが移動しているのを感じるかね？**

「いや。このワシもまた何千となくおるからな。そして、ここが肝心じゃが……そのワシ達のうちには、死にかけではないワシもいる。どんなことでもありえるというわけじゃ。」

死神は鎌の柄を軽くたたきながら、その意見について検討してみた。

**それで、いたいことは...？**

「うむ。本当のところはワシは死にかけてはおらん。そうじゃろう？今となつては、それほど確信はもてんはずじゃ。」

死神はため息をついた。宇宙、死神は考えた。宇宙こそが原因だ。空が常に雲で覆われている世界では、こんなふうになったことはない。ところが、ひとたび人間が宇宙とやらをみたとなん、脳みそが一杯に膨れあがってしまう。

「答えられんようじゃな？」死にかけている哲学者は云った。「ちよつとばかり時代遅れになった気分かな」

**確かに、難しい。死神は云った。昔は祈りを捧げていたものだ、と死神は思った。だが、祈ることに、はたして効果があつたのかどうかも、死神には判らなかつた。死神はしばらく考えた。では、こう答えよう。死神は云った。奥さんのことを愛しているかね？**

「なんじゃと？」

**傍にいてくれた女性だ。愛しているかね？**

「ああ。もちろんじゃ。」

こんな状況を思いつけるかね。過去の人生をいささかなりとも変えることなく、自分がいまこの瞬間に、ナイフを握り奥さんを刺している、という状況を。死神は云った。あくまで一例にすぎぬが。

「ありえん。」

だが貴殿の理論によれば、そうでなければならぬ。宇宙の物理法則のうちには十分おさまっている行為だ。であるならば、起こらねばならない。しかも、何回も。全ての瞬間は何万、何億もの一瞬からなっている。その瞬間のなかでは、起こりえるものは全て必然となる。すべての時間が、いずれは、その瞬間に凝縮していく。

「じゃがもちろん選択することが...」

選択というのかね？生じうる全ての出来事は、生じなければならぬ。その理論によれば、全ての宇宙が「否」を受け入れたとして、「肯」のある宇宙が一つは存在しなければならぬ。だが貴殿が人を殺すことはありえぬという。その強固な確信の前には、宇宙の構造さえ揺らくことになる。その倫理観は重力と等しい強固な力と化す。そして、宇宙には確実に応えねばならぬことがたくさんある、と死神は考えた。

「そいつは皮肉のつもりかの？」

そうではない。感銘を受けたが故に、好奇心をそそられただけだ。死神は云った。貴殿が示してくれた概念は、馴染み深い、二つの伝説の地の存在を証明してくれる。どこかに、全ての者が正しい選択を行った世界が存在する。倫理的な選択のことだ。彼らの仲間の幸福を最大化する選択。もちろん、それはまた同時に、別のどこかには、正しくない選択を行った、煙の立ちこめる世界があることを……

「おい、やめてくれんか。あんたの言いたいことはわかるが、ワシは天国だの地獄だのといったたわごとを信じたことは一度もない。」

部屋は薄暗くなった。死神の鎌の刃が放つ青白い輝きはいつそう鋭さを増した。

おどろいたな。死神は云った。本当におどろいた。ではもう一つばかり、指摘させてもらおう。人間とは、熟れた果物がどこにあるかを伝え合うために発達させた言語を使って、世界創造の壮大さを理解しようとしている、運のいいサル的一种にすぎないのではないかね。

苦しげに息を継ぎながら、哲学者はなんとか云った。「くだらんことは云わんでくれ。」

馬鹿にするつもりで云ったわけではない。死神は云った。状況を考えると、なかなかよくやっているといえる。

「われらは古くさい迷信から自由になったんじゃ。」

そうだな。死神は云った。その意気だ。試させてもらった。

死神は身を乗り出した。

ではこういう理論も知っていよう。さまざまな小さな粒子の状態は、観測される瞬間まで不確定であるという理論を。よく使われるのが箱の中の猫のたとえだが。

「ああ、知っている。」哲学者はこたえた。

すばらしい。死神は云った。彼は、最後の光が薄れゆく中で立ち上がり、微笑んだ。

見てみよう……

---

「死とその次に来るもの」は、斬新的なパズルを集めたゲーム・サイト「タイムハント」  
(<http://www.timehunt.com/timehunt.html>)のために書き下ろされ、発表された。

L-Spaceでは、ご好意により公開許可を得ているが、この小説に関する複写権及び他の権利は、  
テリー・プラチエットが全て保持している。

Translated by M Shimonishi (mao@bu.iij4u.or.jp)